



北海道における琥珀玉の変遷について

西方 麻由（石狩市教育委員会）

本論の目的

北海道及び東北地方の琥珀出土遺跡を集成し、時期的傾向、さらにその原産地について推定する。また、特に北海道で見られる平玉出現期における両地域の関わりの有無についても見解を述べる。

日本の琥珀原産地（図1）

国内の琥珀原産地はほぼ北海道～九州まで分布している。時期的には白亜紀～第三紀に産出する。ただし大きな原産地は白亜紀のもので、太平洋沿岸に多く、中でも岩手県久慈地方は国内最大の原産地ある。また、南サハリンのスタロドゥフスコエ（旧栄浜）の海岸でも海琥珀（註）が採取できる。遺跡の分布と年代別傾向（図2・3）

東北地方では太平洋側に出土が片寄り、久慈地方に分布が集中する。時期的には古代（古墳、奈良・平安時代）が全体の約40%を占める。他の傾向としては、住居からの出土が多いこと、原石や未製品、破片が多く完形品は少ないこと、北海道で出土する平玉が同時期には見られないことがあげられる。

一方、北海道地方では旧石器時代～アイヌ文化期まで琥珀を利用し続けていた（図4～14）。特に、縄文文化晩期末～続縄文文化前半にかけて急激に出土量が増加する（図8・9・表1）。地理的には道東地域と太平洋沿岸地域に分布が集中し、殊に宇津内 a・大狩部期に平玉が出現する。それ以前に平玉は出土しておらず、この時期に同一規格の平玉を大量に生産する現象が起きる。この現象を可能にするのは製作技術だけでなく、平玉の大量生産を可能にする原産地を得たものと思われる。

東北・北海道地方の琥珀原産地について

遺跡分布などから、東北地方で出土する琥珀は久慈産のものと思われる。道内では海琥珀が採取できるが、原石の大きさからいって、これらから平玉を大量に製作するのは難しい。それ以外で平玉製作が可能な琥珀原産地としては、炭田の可能性が高い。久慈産琥珀が北上して来たという見解については、東北地方の琥珀出土例や、道南地域に出土例が無いことから考えても可能性は低い。したがって、分布状況から推測すると、道東地域の炭田が原産地として有力である（図15）。

終わりに

以上のことから、先史時代の琥珀の利用は東北・北海道地方で各々独自であり、原産地についても自地域内で持っていたものと考えられる。特に、平玉は北海道独自文化の象徴といえる。この文化は弥生文化と対峙し、それによって自身のアイデンティティを確認していたのではないかと考える。

平玉の大量生産を支えたのは、それらを作る高い技術をもつ職人と、原産地の発見があってはじめて可能になったと推測される。

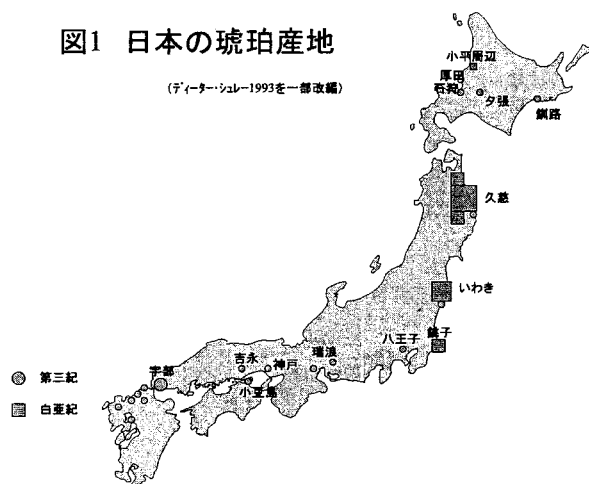
註

嵐などで母床から切り離され海岸に打ち上げられた琥珀のこと。厚田村聚富・望来などで採取可能。

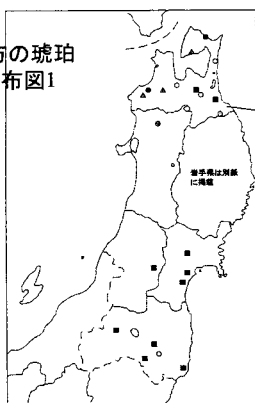
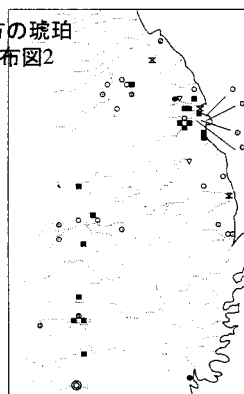
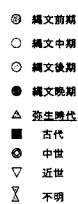
【参考文献】

乾芳宏1998「日高地方の琥珀玉について - 門別町トニカ遺跡の分析 - 」『時の絆 [道を辿る]』石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会

(データ・シュレ-1993を一部改題)



 縄文前期
 縄文中期
 縄文後期
 縄文晩期
 弥生時代
 古代
 中世
 近世
 不明

岩手県内の琥珀出土
遺跡分布図

(宮古市教育委員会蔵田部一氏から
頂いた資料を基に作成)

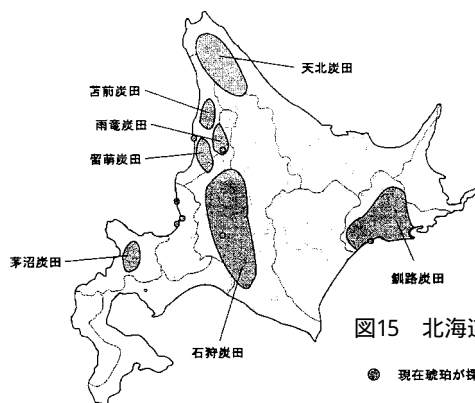


図15 北海道の主な炭田

● 現在琥珀が採取できるところ

矢野牧夫ほか 1978「石炭の語る日本の近代」より引用、編集

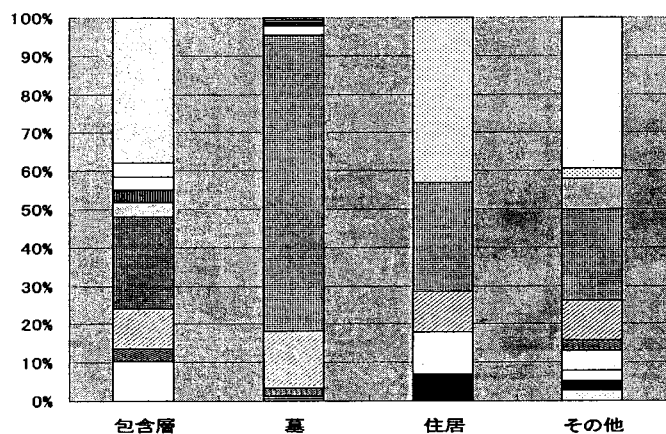
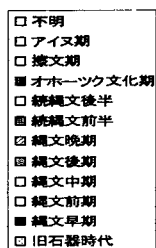


表1 遺構別琥珀出土時期（北海道）



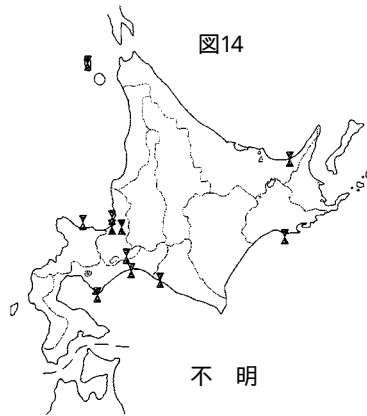
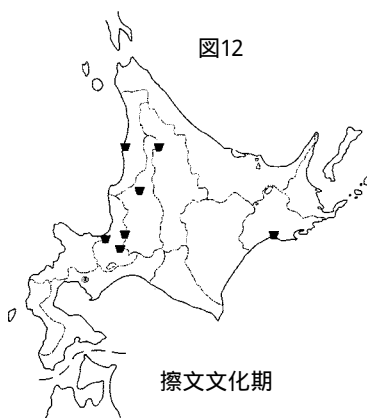
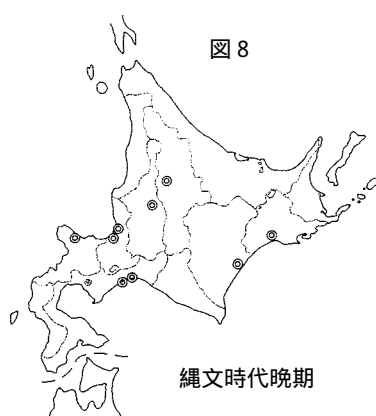
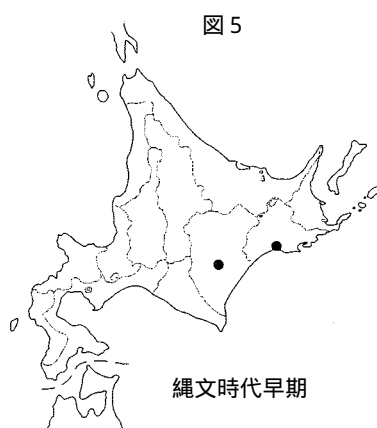
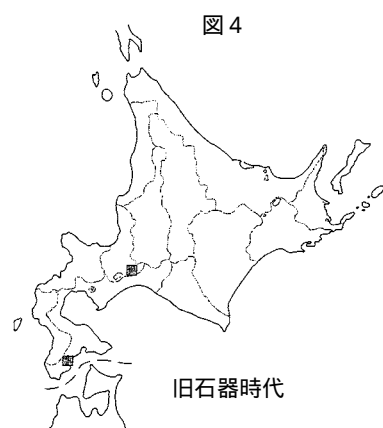


図4～14 コハク出土遺跡時期分布図